

2024年 6月 25日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部
教員研修 実施報告書（Web 公開用）

1. 所属	文学部 国文学科
2. 職名・氏名	教授・田中靖彦
3. 研修期間	2023年 4月 1日 ～ 2024年 3月 31日
4. 研修先機関（国名）	駒澤大学（日本）
5. 研修課題名	南宋における正統論の展開 蕭常『續後漢書』を中心に
6. 研修経過 （月単位で記載してください） 例）4月上旬～5月下旬：	大きく分けて、2023 年度前半は南宋における孫呉評価に関連した研究を、後半は南宋における曹魏評価に関連した研究を行った。 4～5月：『景定建康志』などの諸史料についての研究。 4～8月：南宋士大夫の孫呉論についての研究。 5～10月：蕭常『續後漢書』呉載記についての研究。 9～翌2月：蕭常『續後漢書』魏載記についての研究。 12～翌3月：南宋における曹魏人士評価と、北宋代のそれとの比較についての研究。
7. 本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）	この研修に直接関わる研究成果としては、以下の論文3本がある。 ・田中靖彦「呂祖謙「十論」の孫呉評価について」（『日本中國學會報』75、2023年10月） ・田中靖彦・石井仁「蕭常『續後漢書』呉載記第一・第二の贊について」（『実践国文学』104、2023年10月） ・田中靖彦・石井仁「蕭常『續後漢書』魏載記第一・第二を巡る一攷察」（『年報』43、実践女子大学文芸資料研究所、2024年3月）
8. 所感	本研修期間に行った研究では、南宋における孫呉論という観点からの成果が大きなものであったと考える。南宋の現状を孫呉に投影して三国時代を捉える論が存在したことは、従来よく言われてきた「南宋は蜀漢正統論が主流」といった定説だけでは南宋の三国論、ひいては正統論の展開を捉えきることができないことを、よく伝えている。従来の正統論をめぐる研究では、三国のうち孫呉をめぐる言説が等閑視される傾向にあったが、南宋において孫呉は決して無視された存在ではなかったのである。無論、蕭常『続後漢書』がそうであるように、当時において蜀漢を高らかに賛美する論は有力であったものの、当時における三国論には多様な側面が確認できることを明らかにすることができたと考えている。 また、蕭常『續後漢書』の孫呉評価・曹魏評価を分析し、それを蜀

	漢評価と比較検討することにより、同史料が蜀漢賛美よりも重視する評価基準を有していた可能性を指摘することができた。同史料には蜀漢を高く評価する性格が強く認められることは疑いないが、同史料の三国時代論は必ずしも正統論に基づいた論展開のみで構成されているわけではないのであり、斯かる事例は、南宋における正統論を考えるうえで重要な示唆を与えてくれている。
--	--

※A4 1枚～2枚以内で作成してください。